

地域発 スタートアップ

世界に照準

「新たな医療機器を開発し、世界で年24万人が亡くなる病気を防ぐ」。起業から3年、メドラークス(東広島市)の松浦康之社長(48)は固い志を抱き続けている。2032年に売上高126億円と大きな目標を掲げる。

その病気とはカテーテル関連尿路感染症(CAUTI)。患者の排尿を助けるカテーテルを通じ、細菌が体内に入ることによって発症する。未然に防ぐ医療機器は種類が少ない。開発中の機器は縦5センチ、横7.5センチ、高さ3センチの箱形で、殺菌装置などで構成。尿をためる袋やカテーテルに取り付けて使う。27年に日本とインドで販売する計画で、欧米も視野に入れる。

現場の悩み着眼

松浦社長は東広島市出身。広島大学院で情報工学を学んだ。パナソニックのグループ会社のエンジニアだったが、異動や経営不振も重なり14年に早期退職した。知人の紹介でインドの医科大の新産業育成プロ

感染症に新装置で挑む



インドで起業のアイデアを練った当時を写真で振り返る松浦社長



振動を測るための模擬製造ラインの前で起業への思いを語る島崎助教(いずれも東広島市)

生産設備の不具合検知も

グラムに参加。1年間かけて医療現場の困り事を聞く中、CAUTIを防ぐ機器を開発する道を選び、インド人の仲間と22年にメドラークスを設立した。

松浦社長は「救われるはずの患者のために全力を尽くす。資金調達の重圧もあるが、起業家を選んだことに後悔はない」と言い切る。今後、条件によらず高い殺菌効果を発揮できるような性能を高める。製造を委託するメーカーも探す。

世界に照準を定める新たな製品やサービスを生み、社会課題の解決に挑もうとするスタートアップ(新興企業)が、広島県内でも生まれつつある。ものづくりの業界で海外の市場を狙う若い起業家もいる。

支援制度 土台に

模倣の製造ラインなどで実験を重ねる。故障の予兆が早めに分かれば安全性が向上し、生産停止のリスクも減らせる。島崎助教は23年、米国の大学で起業家支援のプログラムを経験した。海外展開も視野に、今月下旬にはシンガポールとインドに飛んで販路やIT人材の獲得を探った。

島崎助教は「海外に出て世界と広島との交流を増やしたい」と将来像を描き、発行済み株式総額10億以上のユニコーン企業を目指す。自身に続く起業家たちの登場も願う。

松浦社長と島崎助教は、起業を支援するプログラムを経て視野を広げ、仲間を得て発想と方向性を見いだした。ここに、広島で起業を広げるヒントがありそうだ。

新興企業の支援に携わる広島大の早田吉伸教授は「起業家や起業を志す若者が集える場所や機会を増やす必要がある。ビジネスプランなどを気軽に相談できる場があれば起業を後押しできる」と語る。

若者にとっても、先輩の世代が起業に挑む姿は刺激になるといえる。「特に1990年代半ば以降に生まれたZ世代は成長志向が強い」とし、「いい環境や機会があれば起業に乗り出す可能性も大きい」と指摘する。

(宮田圭、高木潤)

地域経済に活力を吹き込む可能性を秘めたスタートアップが誕生しつつある。時代のニーズに合わせて、新たなビジネスを生み出す社内起業の動きもある。奮闘する起業家たちの姿から、新たな担い手を増やすヒントを探る。